

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592837

研究課題名（和文） 不本意に治療を中断する不妊症患者夫婦の要因分析：  
治療開始から1年後までの追跡調査研究課題名（英文） Factors Associated with Couples Unwillingly Interrupting  
Infertility Treatment

研究代表者

實崎 美奈（JITSUZAKI MINA）

聖路加看護大学・看護学部・助教

研究者番号：80412667

研究成果の概要（和文）：本研究では、挙児希望で医療施設を受診したカップルが不本意に治療を中断する要因を明らかにすることを目的に、治療への満足度を中心とした質問紙により初診から6ヶ月後までの3時点にて調査を行った。その結果、通院継続中のカップルの初診時点での挙児希望度は必ずしも一致しておらず、初診時点での通院期間のめやすの有無や通院中の施設の影響は通院の継続には関連していなかった。一方、通院の継続によりカップル間の支え合いは上昇していた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine factors associated couples unwillingly interrupting their infertility. Questionnaires were distributed at three points in time: 1st visit, 3 months and 6 months, to query satisfaction on their treatment. We found that husbands and wives wishes to have children were not always the same at the 1st visit. No correlations were found with: previous limitations on treatment; impressions of medical institutions and duration of treatment. Participating in treatment strengthened their conscious support for each other. Understanding these factors may help to reduce treatment dropouts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：不妊症看護、初診時ケア、患者カップル、治療への満足度、不本意な治療中断

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は長年にわたり、不妊治療中の夫婦への支援に関する研究を継続してきた。

これまでに不妊治療専門医受診前の心理の調査、不妊治療を長期継続できた女性に対する調査を行った結果、「消耗性の危機」が、

治療開始前から生じていることが判明し、治療初期の看護介入の重要性がわかった。さらに、治療開始早期に、子どもをほしいと思いつつもながらも治療を断念する不本意な治療の中断やドクターショッピングは、生殖医療関係者の間では 10 年以上も問題視され続けており、いかに不妊治療に伴う苦痛や負担を軽減するかが、この問題を解決するための鍵であると考えた。

本研究では、初診患者夫婦に対して質問紙調査を行い、何が不本意な治療の中断を招き、何が夫婦の意思決定に基づく治療の継続あるいは治療の終結に結びつくかの追跡調査を行い、特に患者夫婦の初診時点での満足度や特徴が、その後の治療経過にどのように関連しているのかを明らかにする。本研究の成果は、初診患者夫婦の治療への満足度を高め、不本意に治療を断念するケースの減少および治療後の夫婦の QOL の向上に繋がると考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 日本産婦人科学会に不妊治療実施施設として登録されている施設を挙児希望で受診した初診患者カップルに対し、質問紙調査を行う。調査はカップル双方に対して行い、初診時の満足度に関連する要因を多角的に分析し、明らかにする。

(2) 上記(1)の調査対象者らが初診から 3・6・9・12 ヶ月経過した時点での治療への満足度調査を行う。初診後 12 ヶ月後までの治療状況から早期ドロップアウトの傾向の把握や満足度の変化を分析し、明らかにすることにより、不妊外来における初診患者への支援のあり方について検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 測定用具

研究者が行った過去の研究成果をもとに質問項目を検討し、既存のクライアント満足度調査票（以下、CSQ-8J）を併用して調査票を作成する。

### (2) 調査対象者

日本産科婦人科学会に不妊治療実施施設として登録されている施設の不妊外来を初めて受診した患者カップル 200 組とする。

### (3) 調査方法

上記の調査対象者に対し無記名自記式の調査票を用いた初診時および初診後 3 ヶ月、6 ヶ月を経過した時点での調査を行う（文献検討の結果、追跡を 6 ヶ月後までに修正した）。対象者の匿名性を保ちつつ 3 回の調査において対象者個々の経時的な変化を追跡できるよう工夫する。

### (4) データ収集方法

① 研究協力への承諾が得られた施設の不妊外来担当者に対して研究の趣旨等を説明し、調査票等の配布を依頼する。

② 研究協力施設の不妊外来担当者は調査対象者へ研究協力依頼書、研究への参加・協力の同意書および調査票を配布する。調査対象者は無記名式の調査票に回答し、研究者へ郵送する。また、追跡調査にも協力できる場合には研究への参加・協力の同意書を記入し、別封筒にて研究者へ郵送する。研究者へ回答済みの調査票および記入済みの研究への参加・協力の同意書を送付した者を本研究での分析対象者とする。

③ 研究者は、追跡調査協力者へ初診後 3 ヶ月、6 ヶ月を経過した時点で追跡調査への研究協力依頼書および調査票を郵送にて配布する。調査対象者は、研究者から郵送された無記名式の調査票に回答し研究者へ返送す

る。

#### (5) 倫理的配慮

本研究への協力は各施設および対象者の自由意思により、協力の諾否による不利益は生じないこと、研究への協力を途中で取りやめることができること、調査票は無記名であり、追跡調査のために知らされた対象者の連絡先および氏名は別々に返送され、調査票とは別に保管することにより匿名性を保てることなどを書面および口頭にて説明した。本研究は聖路加看護大学研究倫理審査委員会（承認番号：11-027）および研究協力施設の研究審査委員会の承認を得て実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 不妊治療を長期継続できた要因

不妊治療中の女性が治療を長期継続した要因を明らかにすることを目的とし、不妊治療を5年以上継続している女性9名に半構成的面接調査を行い質的帰納的に分析した。その結果、不妊治療を長期継続できた要因は最終的に、「夫の支え」、「治療環境への好感」、「初診時に治療期間のめやすをもたない」、「治療計画の自己管理」の4つのカテゴリに集約された。これらの要因から、不妊治療を長期継続した女性の特徴として、困難への認知的対処と夫・コメディカルスタッフなどの社会資源の活用による治療計画の自己管理と、治療期間のめやすをもたないまま治療を開始したことによる治療の長期化の2点が推測された。

#### (2) 初診患者カップルの背景と治療への満足度

調査票は210組（420名）に配布され、61名（男性26名、女性35名）から回収された（回収率：14.5%）。平均年齢は36.4歳（男性36.7歳、女性36.2歳）であった。今回の

施設を受診する以前に挙児希望で他の医療施設を受診した経験をもつ者は24名（39.3%）であり、その理由として「妊娠しなかった」「不妊治療専門の病院ではなかった」「乏精子症と診断され、転院を勧められた」「通院が仕事に支障するから」「施設へ不信感を持ったから」などがあった。通院期間のめやすがあると回答した者は33名（54.1%）であった。

回答者61名中、カップルでの回答は24組あった。子どもを持つことに関する思いについて「子どもがほしい」「パートナーを親にしてあげたい」「親を祖父母にしてあげたい」「跡取りがほしい」の4項目について、回答を1点（全くそう思わない）～5点（とてもそう思う）に点数化する質問項目を設けた。最も回答の一致度が高かったのは「パートナーを親にしてあげたい」が18組（75.0%）、最も一致度が低かったのは「跡取りがほしい」が4組（16.7%）であり、この項目のみ、カップルの回答に3点差があるものが4組（16.7%）あった。

CSQ-8Jへの回答があったものは51名（男性19名、女性32名）であり、平均点は24.3点（32点満点）で男性24.3点、女性24.4点で有意差はなかった。

治療への満足度に関連する関連する要因の探索を行ったところ、受診した施設の全体的な印象（ $p < 0.01$ 、相関係数0.519）、受診した施設のハード面の環境（ $p < 0.05$ 、相関係数0.471）、自分の思いを医療者に話す時間の有無（ $p < 0.05$ 、相関係数-0.412）との有意な相関がみられた（表1）。一方、カップル間の支え合いや挙児希望の一致度とは関連が見られなかった。

表1. CSQ-8Jの得点分布と対象者が受診時に受けたケア等との関連

N=51

CSQ-8Jの得点分布と比較した項目	有意確率	相関係数 (Pearson)
育児希望期間 <sup>注1</sup>	0.868	
育児希望での他医受診歴の有無 <sup>注2</sup>	0.654	
妊娠回数(女性のみ) <sup>注1</sup>	0.500	
通院期間のめやすの有無 <sup>注2</sup>	0.316	
全体的な施設の印象 <sup>注1</sup>	0.006**	0.519**
施設のハード面の環境 <sup>注1</sup>	0.045*	0.471**
施設のソフト面の環境 <sup>注1</sup>	0.122	
説明の時間の有無 <sup>注1</sup>	0.305	
説明用の資料の有無 <sup>注2</sup>	0.847	
自分の思いを医療者に話す時間の有無 <sup>注2</sup>	0.028*	-0.412**

注1: Kruskal-Wallisの検定、\*P<0.05, \*\*P<0.01  
注2: Mann-WhitneyのU検定

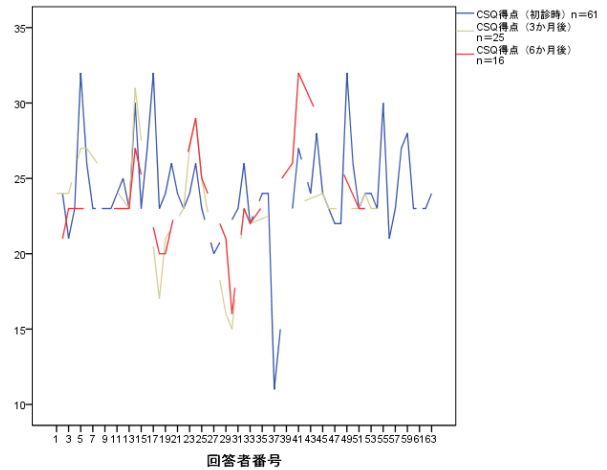
### (3) 追跡調査対象者の治療への満足度

3ヶ月後の追跡調査への協力が得られたのは19組(38名)であり、25名から回収(回収率:65.8%)、6ヶ月後調査への協力が得られたのは16組(32名)であり、18名から回収された(回収率:56.3%)。

初診後3ヶ月までに通院を中止していたのは5名、その理由は「男性の検査が終了した」「妊娠した」「通院に支障をきたす」「施設への不信感が生じた」などであった。6ヶ月後までに通院を中止していたのは4名、その理由は「タイミング療法中なので自分は通院する必要がない」「妊娠した」であった。現在の通院状況について、不本意に感じているかどうかについては、3ヶ月後では、「不本意である」と回答した者はなく、1名が「やや不本意である」、7名が「どちらともいえない」、4名が「あまり不本意ではない」、12名が「不本意ではない」と回答しており、6ヶ月後では2名が「不本意である」、3名が「やや不本意である」、3名が「どちらともいえない」、3名が「あまり不本意ではない」、6名が「不本意ではない」と回答していた。「不本意である」「やや不本意である」と回答した5名は人工授精や体外受精の治療周期に進んでいた。通院期間中に妊娠が成立した2組のうち、3名は「不本意ではない」と回答していたが、1名は「やや不本意である」と回答していた。

このカップルは体外受精により妊娠が成立していた。

3ヶ月後のCSQ-8Jの平均点は22.8点(男性23.0点、女性22.6点)、6ヶ月後の平均点は23.1点(男性23.5点、女性23.3点)であり、初診時、3ヶ月後、6ヶ月後の調査時点における3群間に有意差はなかった。



初診時点での通院期間のめやすの有無や通院中の施設の印象は通院の継続には関連していなかった。通院の継続により、カップル間の支え合いは上昇傾向にあったものの、有意差はなかった。また、通院を継続しているカップルの初診時点での育児希望度は必ずしも一致していなかった。

本研究での追跡調査は、特に治療中断者からの回収数が少なく、データを分析するうえで十分な結果が得られたとは言い難い。その要因として、追跡調査への協力には対象者の氏名および調査票送付先を研究者に知らせてもらう必要があったため、研究協力施設および対象者本人からの同意が得られにくかったことであると考えられる。

### (4) 研究成果のまとめと今後の課題

本研究における初診患者カップルへの調査結果から、育児希望で不妊治療施設を訪れるカップルの背景および治療への満足度に

影響を与える要因についての示唆を得ることができた。初診患者の約4割は挙児希望で2施設以上を受診しており、半数強が通院期間の具体的なめやすを持っていた。治療への満足度に影響を与える要因は、①受診した施設の全体的な印象②受診した施設のハード面の環境③自分の思いを医療者に話す時間の有無の3点であった。

追跡調査の結果からは、6ヶ月後までの通院期間中に治療への満足度は変化しないことがわかった。また、現在の通院状況を不本意に感じる要因として、仕事と通院との両立ができにくいこと、人工授精や体外受精の治療周期に進んでいることが考えられ、通院により妊娠が成立していても受けた治療を不本意であると感じている者もいることがわかった。カップルの回答の比較からは、初診時点での挙児希望度は必ずしも一致していなかったものの、通院の継続によりカップルが互いを支え合う思いは高まっていくことがわかった。

本研究では、特に追跡調査への協力者が少数であったためにこの結果が一般的であるとは言い難い。しかしこれらの成果をふまえ、本邦では明確に提示されていない不妊外来における初診カップルへのケア開発につなげていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 實崎美奈、不妊治療を長期継続した女性の継続要因に関する質的研究、日本生殖看護学会誌、査読有、8巻、1号、2011、33

-39

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

實崎 美奈 (JITSUZAKI MINA)

聖路加看護大学・看護学部・助教

研究者番号：80412667

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

堀内 成子 (HORIUCHI SHIGEKO)

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：70157056

森 明子 (MORI AKIKO)

聖路加看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60255958